



日本記者クラブ昼食会

国際民主主義支える非同盟

ラジープ・ガンジー インド首相

1985年11月30日

page 2

近代化と伝統の両立目ざし
非同盟は強力になっている

page 3

核拡散防止条約は不平等
軍縮こそ第一義的テーマ

page 4

アフガン、カンボジアとも撤退可能
印パ関係は一步後退、二歩前進

page 5

南アジアの地域協力で緊張緩和も

新井理事長（司会）: 中曽根総理ほか日本側関係者との会談もすべて終了し、ガンジー首相にとって、この会見がいわば最後のハードルであります。お手並みを拝見させていただいた後、京都旅行へ向かっていただきたいと思っております。（笑）

近代化と伝統の両立目ざし

ガンジー首相: 理事長、そして友人の皆さん、私は、今日のご招待を大変うれしく思っております。日本もインドもともに報道の自由を堅持しています。これこそ民主主義にとって強力かつ必要不可欠の要素です。

今回が私にとっての初訪日です。日本で皆さんが何を達成されたかについて学び、また私たちの国インドについてお話し申し上げるため、来日いたしました。私自身の目で、皆さん方が伝統を失うことなく近代化を達成された様子を、直接見ることができました。私たちインドも、同じことをしようと努力しているところであります。

中曽根総理と私は、二国間および国際的な諸問題について、話し合いをいたしました。この話し合いを通じて、両国が世界の諸問題についてのアプローチで、共通点を多く持っていることが明らかになりました。これは、日本とインドが国連またはその他の場において、平和共存と国際協力のために積極的に協力していく上で、大変結構な兆しであります。

この対話を通じて、両国の関係を一層発展させる、新鮮な刺激が得られました。私たちの開発努力については、日本政府の理解と支援をいただいております。これがさらに拡大されることとなります。日本の産業は、インドの民間および公共両部門で、パートナーを見出して進出しております。私たちが工業化の次の段階に進むに当たって、特により優れた品質、よりよい経営、より高度の技術を強調して、次の段階に入るわけですが、こうした時に際して、両国間の協力がさらに有意義に拡大することを期待しております。

両国間には、昔から文化的、精神的な結びつきがあり

ます。そしてこの絆が、日本で開かれるインド祭、およびインドで開催される日本週間を通じて、新たな活力とダイナミズムを得るものと希望しております。

日本とインドは2つの、アジアにおける偉大な民主主義国家です。両国の政治体制が類似していること故に、相互の協力はあらゆるレベルにおいてやりやすいものになっています。お互いをよく知るようになり、よりよく相互の政策を理解することができ、そして平和と繁栄のために協力する道を学びつつあります。

日本政府、中曽根総理、およびこの美しい国の国民の方々の温い歓迎に対し、心から感謝を申し上げます。そして、訪日の最後の段階である京都訪問を、いま心待ちにしております。

質疑応答

伊藤（共同）: あなたがインドの総理になられて、ちょうどネール家から3代続いてインドの指導者が出たことになるわけですが、日本語では“因縁”と申しますが、何か特殊な因縁を感じていますか。

3代の指導者はいずれも非同盟運動の指導者でもありました。現在、非同盟運動はあまり好調ではないといいますが、あなたは非同盟運動の指導者として、世界の人々、特に日本の人々や政府に、どういうことをアピールしたいと考えていますか。

非同盟は強力になっている

ガンジー首相: 第1問に対する答えは簡単です。因縁は「ノー」であります。「なし」です。

第2問ですが、私は非同盟運動がその勢い、モメンタムを失っているとは思いません。歴史にかつてなかったほど強力なものになっていると思っています。私の考えでは、非同盟運動とは、いわば一つの国の国民のあり方、ナショナル・アイデンティティー、またはナショナルリティーというものを、国際的な問題に投影させるものであると考えます。言い替えますと、国際間

題について、すべての国々がその意思を自由に表現できる権利を持つための民主的なシステム、これこそ非同盟であると思います。これによっていろいろなグループのあいだの緊張を緩和し、融和をはかり、そして平和と発展を促進することができると信じます。

川端（時事）: 核拡散防止条約についての質問です。パキスタンのハク大統領は、東の隣国がサインするなら、自分の国も喜んでサインすると言っております。またインド政府も同じように、西の隣国がサインするなら、サインすると言っております。日本およびその他の国々の政府は、それではインドとパキスタンが同時にこれにサインしたらどうか、と勧告しています。これについての首相のご意見はいかがでしょうか。

核拡散防止条約は不平等

ガンジー首相: 私たちの立場は明瞭です。質問された方は、その立場を誤解していると思います。私たちは、いまの形で核拡散防止条約にサインをするつもりはありません。これはあまりにも一方的な片寄せたものです。核保有国と非核保有国の両方に対して、平等な扱いをしているとは信じられません。すでに調印した国々、なかんずく核保有国で調印した国は、約束したことを守っておりません。たとえば、核の拡散を防止すると約束しておりながら、それが実行されておられません。軍縮もやると言っておきながら、これが実行されていません。そのような不平等なものにサインをするつもりは、私たちはありません。

私たちはパキスタンとは、別途に話を進めております。平和、協力、友好の相互条約を結ぼうという話をしています。過去11年間にわたって、私たちは核兵器を開発する意図がないことをはっきり表明してきております。核兵器を保有する力は持っていますが、それを使って開発しようとしていないというのが、私たちの従来からの立場です。このような例を示すことができる国は、世界広しといえどもあまりございません。私たちは、今日でも依然として核兵器を開発する意図はありません。

増子（朝日）: 6年半ぶりの米ソ首脳会談で、米ソ関係は新たなスタートを切ったと言われています。しかし、肝心の中心テーマである包括軍縮交渉の分野では、ほとんど進展をみなかったようであります。ジュネーブでの米ソ首脳会談は、緊張から平和への転換点になり得るかどうか。ゴルバチョフ書記長とレーガン大統領のどちらにも会われている首相に、この首脳会談をどう評価するか、うかがいたいと思います。

もう一点、首相がゴルバチョフ書記長に会われた時、ゴルバチョフ書記長は、全アジア安保会議構想を提唱いたしました。この構想について首相はどう考えているか。

軍縮こそ第一義的テーマ

ガンジー首相: まず第一に米ソ首脳会談ですが、私はレーガン大統領、ゴルバチョフ書記長の双方にお会いして、二人とも真摯に平和を求め、軍縮のために努力しようとする意思があるということを感じ取りました。しかしながら、そのプロセスは大きな困難を伴うものであります。日本の皆さんと同様に、私たちも、軍縮というテーマが十分にジュネーブで取りあげられなかったことに対して失望しています。同時に、軍縮は極めて複雑な問題である、ということも理解しています。ただこれがスターティングポイントであるということでもあり、1月にまた会議が開かれるようですので、それを期待し、そこからさらに積極的な正しい方向への動きが、十分にわれわれの満足のいくようなペースで始まることを期待する次第です。

この二人のリーダーが相互に知り合ったということは、緊張の削減に有効です。今回のジュネーブでのサミットは、二人が接触したという意味で、非常に効果のあったものだと考えます。二人が仲良くいろいろなことを話し合ったというだけでも、世界全体にとって大変よいことです。世界はより積極的な方向に向かって、すなわち軍縮に向かって動いていくであります。軍縮こそ、まさに今日の世界が直面している第一義的な問題であります。

第二の質問ですが、私は、何ら具体的なプログラムを提示されたわけではありません。安全は、アジアだけではなく、世界のあらゆるところで必要なものです。アジアだけの安全を語ることは容易なことではありません。もちろん、アジアの安全のために、私たちは努力しなければなりません。安全、セキュリティというと、何か一種の取り決めのように聞えますが、そうではありません。緊張を柔らげることが、すべてセキュリティの問題であります。インドも日本も、アジアの重要な民主主義国家として、この分野において果たすべき大きな役割があると考えます。

伊藤（毎日）: ジュネーブの米ソサミットに関連して、二つの地域紛争についてお尋ねしたい。一つはアフガニスタン問題で、もう一つはカンボジア問題です。

アメリカ側はアフガニスタン問題で進展があった、と盛んに言っています。12月から始まるパキスタンとアフガニスタンの間接交渉で、ソ連側が段階的な撤兵の計画を提出するのではないか、というような見方があります。ガンジー首相は、国連40周年記念総会の帰途、ソ連に立ち寄られてゴルバチョフ書記長と会い、この点について協議されたようにうかがっております。ソ連が本当にアフガニスタンから撤退する準備ができているのか。この点で政治的な解決が可能であるかどうか。インドとしてはどうみているか。

ガンジー首相は日本にいらっしゃる前にベトナムのハノイに寄られました。その際ベトナムの首脳とも、カンボジア問題について協議されたと思うのですが、カンボジア問題で何らかの進展があるかどうか。どういう感触が得られたかをうかがいたい。

アフガン、カンボジアとも撤退可能

ガンジー首相：私、ゴルバチョフ書記長には5月にお会いし、6月にレーガン大統領にお会いし、10月にまたお二人にお会いしたわけですが。ソ連はアフガニスタンから手を引く用意がある、と私は信じています。ただし、そのためには一定の保証が、アフガニスタンに対してなされねばならない。そうすれば、撤退する

用意があるというふうにソ連は考えている、と私は信じます。またアメリカ側もまた撤退とギャランティーについて同時に話し合うつもりがあるというふうに、私は信じております。それがどのようなギャランティーであるかは、これは両者間で話し合いをしてもらわなければなりません。しかし、問題を解決しようとする意図はある、と私は信じています。ジュネーブの首脳会談で、雰囲気というかムードというものはできました。次は進歩が起こることを期待するだけであります。

ベトナム訪問で、カンボジア問題について話をいたしました。ベトナム側では、1990年までには撤退することができる、という趣旨のことを言っております。ことによったら、それより早いかもしれない、ということも言っています。現在、東南アジアの国々からの幾つかの提案が出ていますが、これがいわば話し合いのベースになり得るかもしれません。しかし、今後どのように進展するかを見守らなければなりません。

カーン（アラブニュース）: 詩人タゴールはベンガル語で「カプリワラ」を書きました。そのカプリのいい人たちが、いま難民として400万人ですか、あちこちにいるんです。その人たちを国に帰すために、ガンジー首相は何か特別な努力をしていच्छायいますか。また世界で一番古いパレスチナ人の難民たちのことについても何か考えていच्छायいますか。最後に隣のパキスタンといつ仲良くしますか。

印パ関係は一步後退、二步前進

ガンジー首相：パレスチナ問題についての私たちの立場は、すでに非常に明瞭にしているところであります。何ら加えることはありません。私たちは一貫して、そして現在でもPLO支持の姿勢をとっています。彼らは、あの地域内にホームランド（祖国）を持たねばなりません。しかし、この状況は、現在では解決が非常に困難であります。いろいろな人たちがこれに関わっているからです。私たち自身は、これに関わってはおりませんけれども、この問題が終結することを望んでおります。

最後の質問ですが、その国とは友好関係を深めるべく、橋をつくるべく真摯な努力をしています。両国の関係は一時大いに後退いたしました。しかし、いま変わっております。いまでは一步後退するたびに二歩または三歩前進しています。

パキスタンのハク大統領とは、私、すでに4回お会いしました。次の2週間半のあいだに、さらに2回お会いすることになっています。12月16日には、ハク大統領をインドにお迎えすることになっています。このようにいろいろなステップが取られており、また政府、事務レベルなどいろいろなレベルで会議が開かれており、それによって友好関係が促進されるようになっています。私としてもぜひパキスタンを訪問したいと思っています。

吉村(朝日): 南アジアの国際関係についてうかがいます。一つは、首相が帰国後間もなくダッカで南アジア7か国の首脳会議が開かれます。この南アジア協力機構の将来について、首相はどう考えているか。たとえばA S E A Nとか、E Cのように、経済的な協力機構にまで将来進む展望をお持ちかどうか。

もう一つ、日本としては、インドとパキスタンとか、インドと中国とか、インドとその周辺の国々との関係に非常に関心があるわけです。そういう関係がこれからどんどん改善されていく見通しがあるのだろうか。パキスタンとの問題では、核兵器の開発問題、中国との問題では国境の問題が大きな障害となって、なかなかうまくいかないという見通しもあるわけですが、そういうふうにも考えてもいいのだろうか。それとも何かそれをうまく超えていく展望があるか。

南アジアの地域協力で緊張緩和も

ガンジー首相: すべての問題は必ず解決できます。従って答えはイエスです。「南アジア地域協力」(S A R C)は12月の第一週の終わり頃、第一回の会合を開きます。すでに9つの協力の分野を、私たちは、はっきり定義しております。そしてあらゆる方向に、これが展開していくことを期待しています。すなわち、これ

らの国々のあいだの文化、伝統、遺産の共通性は、私たちの国々を結びつける上で大きな力となるものであります。私たちの関係をよくしていくことによって、地域の緊張を緩和することができると信じます。

もう一つの点については、実は二点ほど厄介な問題があるということを申しあげたいと思います。それが、私が先ほど言った一步後退しつつ二歩前進と言ったことの意味です。パキスタンの核開発計画は確かに問題ではあります。しかし、包括的な平和友好協力条約を結ぶことによって、この問題に対処することができると私は考えています。

中国の首相とはニューヨークで、ある程度お話をいたしました。また、事務レベルではデリーで国境問題についての話し合いも行われました。中国首相との話し合いは、なかなかよいものでありましたし、事務レベル協議もある程度の進展をみせました。解決には時間がかかるでしょう。そして困難も大であります。しかし、両方とも必ず解決できると、私は信じています。あらゆる国々、決してアジアだけではなく、世界のすべての国々とでありますけれども、なかならず、アジアの国々とは友好関係を樹立していきたいと私たちは望んでおります。

一言付け加えますが、インドの核開発計画は全く平和目的であります。そして、それをそのように今後ともずっと維持していくつもりです。たまたま偶然ですが、ハク大統領がインドを訪問される12月16日は、わが国の新しい原子力発電のための原子炉が運転を始める日であります。その日にハク大統領をお招きいたしました。

これでお分かりのように、私たちのやり方は全くオープンで開放されたものです。見てもらうこともできるわけです。民主主義的な制度、慣行のもとに、全くの民間部門での平和目的の核利用だけをやっているわけです。国会においても、誰でもこれについて突っ込んだ質問ができます。

安延（毎日OB）: パレスチナ人がホームランドを持つことを支持すると言ったのですが、それはホームランドですか、それともインデペンデントステートのほうですか。

もう一つ、2月11日（85年）に、フセインとアラファトのあいだで共同声明に関する合意ができて、その合意はアメリカも側面から支持していると思いますが、これを進めていくことに首相も賛成されますか。

ガンジー首相: 第一の質問ですが、それは両方です。民族国家を持つことのできる土地を持たねばなりませんから、ホームランドとステートという意味の両方です。

私たちは、ヨルダンのこうしたイニシアチブを支援しています。これが成功することを望みます。ただ巨大な困難を伴うものだというふうに感じております。一見して感じられるほど容易なものではありません。

司会: かなり難しい質問にも率直にお答えいただきまして、ありがとうございます。時間はまだ少しあるのですが、この辺でハードルを越えていただいて、今度は京都のほうへ行ってもらいたいと思います。非常に率直なお答えを、本当にありがとうございました。

この記者会見を記念いたしまして、日本記者クラブといたしまして、漆塗りの富士山の絵をあしらった非常に高価な万年筆をお贈りしたいと思います。

ガンジー首相: ありがとうございます。皆さんに最初に、友人の皆さん、とご挨拶申しあげましたけれども、会見を終えて去るに当たっても、友人として去ることができることをとてもうれしく思います。

通訳 村松増美

文責・編集部